

## 安史の乱による唐の東北政策の後退と渤海の小高句麗国占領

日野, 開三郎

<https://doi.org/10.15017/2320983>

---

出版情報 : 史淵. 91, pp.1-36, 1963-07-31. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :

## 安史の乱による唐の東北政策の

### 後退と渤海の小高句麗国占領

日野 開三郎

天宝十四年（七五五）十一月甲子、范陽・平盧・河東三節度使安祿山、所部の兵及び同羅・奚・契丹・室韋等の蠻兵共せて十五万を以て范陽に叛し、衆二十万と呼号す。<sup>註203</sup> 范陽節度副使賈循をして范陽を、平盧軍節度副使呂知誨をして平盧を、別將高秀巖をしく大同を守らしめ、その子安慶緒を留守の総帥として范陽に置き、親ら兵を率ゐて南下す。<sup>註204</sup> 步騎精銳、煙塵万里、鼓譟天地を震はす。時に海内久しく承平、百姓累世兵革を識らず、且つ河北は彼の統内なるを以て、過ぎる所の州県、或は風を望んで出迎し、或は狼狽竄匿して一人の抗拒する者なく、東都洛陽忽ちにして陥り、翌至徳元年、首都長安亦敵手にわたる。玄宗成都に蒙塵し、太子靈武に逃れ、互の聯絡を失ひ、太子即位を行ふ（肅宗）。大唐極盛の夢は一瞬にして破れ、今や崩壞の危機に迫られたが、翌二年、祿山は慶緒に殺され、慶緒は史思明に殺され（乾元二年〓七五九）、史思明は子の史朝義に殺され（上元二年〓七六一）、史朝義はその將李懷仙に殺され（広徳元年〓七六三）、李懷仙降つて、さしもの大乱も九年を経て賊軍内部の相次ぐ内訌に漸く終熄することとなつた。此の間、天下騒動して正に鼎の沸くが如く、乱後も賊の余孽尚河北に盤拠し節度使として朝命に抗し、又乱を機として内地に普く列置せられた藩鎮が日益しに驕横跋扈を逞しくし、かくて玄宗中興の盛世は全く覆り、最後に唐朝の命脈も驕藩の手によつて絶たれたのであ

る。

乱中乱後に於ける国歩の多難、国力の消耗疲弊は必然的に対外威信を失墜し、加ふるに大乱鎮定に回紇等の外援を借りたことから彼等の軽侮侵暴を受けることとなつた。大唐の政局は安史の乱を境に内外共に一変したのであるが、大乱勃発前の大唐の国力が余りにも大きかつただけに、その凋落が齎した内外への影響も廣大深刻であつた。殊に東北の諸勢力、即ち渤海・小高句麗・奚・契丹等の間に捲き起された波紋は、彼等が此の大乱の中心となつた地区に於いて唐境に隣接してゐただけに特に大きかつた。安史の大乱が小高句麗を中心とする国際關係に与へた最大の変化は、此れを一口に掩へば、小高句麗の唐の羈縻からの離脱とそれに代る渤海の小高句麗支配である。よつて先づ唐が大乱の為に東北面控制の力を喪ひ、その羈縻体制が崩壊して行く過程を考察し、次いで渤海の小高句麗占領の事実を考証することとする。

### 第一節 唐の小高句麗国に対する宗主権の喪失

唐の東北面控制の最前線武力機関は平盧軍節度使であり、その背後から此れを大きく支へてゐたのは河北（范陽）節度使であるが、此れらの諸藩が安史叛乱軍の地盤であつた以上、大乱の勃発が直ちに唐の東北政策に致命的影響を与へるものであつたことは言を俟たずして明かである。然し最前線の平盧藩が大乱中にどの様な動きを示し、どの様な役割をつとめたかは、小高句麗国に直接至大の影響をもつ問題として具体的に詳究する必要がある。乱中の平盧藩は初め勤王・叛乱の両派に分れ、次第に勤王側に固まつて行つたが、その為に叛乱軍の巢穴たる范陽の背後に孤立し、やがて没落して終つた。唐の小高句麗国に対する宗主権の失墜は此の平盧軍節度使の没落にその実相を映出しており、然も關係史料の極めて乏しい小高句麗国の乱中における唐との關係を追究し得る途は殆んど此の平盧藩の没落過程の考察に限られてゐると云ふを過言でない。

第一項 平盧軍節度使の没落

安祿山の挙兵に際して范陽の固めを委せられた賈循はよく一藩を纏めて安祿山を援けたが、平盧を托せられた呂知誨は安東都護府の勤王派に妨げられて挙藩態勢の形成に失敗し、逆に勤王側の挙藩態勢を固めさせることとなつた。資治通鑑<sup>卷二一七</sup>至徳元年四月末の条に

安祿山使平盧節度使呂知誨誘安東副大都護馬靈督殺之。

とあり、旧唐書<sup>卷一四五</sup>劉全諒伝に

知誨遂受逆命。誘殺安東副都護・保定軍使馬靈督

とある如く、安祿山によつて平盧節度使に任ぜられた呂知誨は安東副大都護兼保定軍使の馬靈督を誘殺してゐるが、それは馬靈督が祿山側に服しなかつたこと、即ち勤王側に立つた為に相違なく、おびき出して殺したのは保定軍との交戦を避ける為であつたのであらう。此の誘殺事件に対する都護府側と平盧軍側との反響を見るに、資治通鑑の上文の続きに

平盧遊奕使武陟劉客奴・先鋒使董秦及安東將王玄志。同謀誅知誨。

とあり、劉全諒伝に

客奴与平盧諸將同議。取知誨殺之。

とあり、同卷・李忠臣（旧名董秦）伝に

至平盧軍先鋒使。及祿山反。与其倫輩密議。殺偽節度呂知誨。

とあつて、平盧軍の幹部軍將たる先鋒使董秦や遊奕使劉客奴等が都護府側の軍將王玄志等と共に呂知誨を殺したことを伝へてゐる。即ち平盧藩の牙軍たる平盧軍の内部も勤王派が寧ろ有力であつたのである。所で安東の將王玄志の呂知誨誅殺参加に就いて劉全諒伝の上文の続きには

安史の乱による唐の東北政策の後退と渤海の小高句麗国占領（日野）

仍遣与安東將王玄志通相承接。

とあつて、王玄志は誅殺には直接手を下すことなく、遙かに都護府から呼応声援したにすぎなかつたことを明かにしてゐる。所で此れまでの平盧軍や都護府の活動に都護の消息が全然伝へられてゐないが、此れは専任の都護が任命せられてゐなかつたからであらう。専任の都護が屢々缺けてゐたことは先に述べた如くである。果して然らば副大都護の馬靈督は都護の任を代行してゐた事実上の長官であつたことになる。思ふに事実上の都護府長官たる馬靈督は天宝二年の大軍拡によつてその周辺に少くとも七軍団を有することとなつた都護府の軍事力を背景にして勤王側に立ち、潜かに平盧軍の内部にも働きかけ、相当の同志を獲得してゐたのであらう。その時叛軍側の呂知誨が感づき、恐らく同志を枉つて誘殺したのであらう。長官を失つた都護府側は宿將王玄志が志を継ぎ、平盧軍内の同志と呼応して呂知誨を瘞したものと思はれる。唐朝は彼等の勤王を嘉賞して劉客奴（正臣と改名）を平盧節度使に、註205董秦を平盧兵馬使に、註206王玄志を安東副大都護・保定軍使に任じた。註207

安祿山派を誅して平盧藩を勤王側に固めた劉正臣等は直ちに海上より使者を送つて顔真卿に聯絡をとつた。資治通鑑の上文の続きに

遣使諭海。与顔真卿相聞。請取范陽以自効。

とあり、新唐書卷一顔真卿伝に

会平盧將劉正臣。以漁陽歸真卿。

とある。漁陽郡は薊州で、范陽節度使の巡属であり、平盧の管域外である。従つて漁陽を以て帰属したと云ふのは柳城（營州）の誤りではないかとの考へが抱かれるが、一概にさうも断言できない。薊州漁陽郡は開元十八年に幽州の一部を割いて置いた州郡で、新唐書卷三地理志・河北道・薊州の条に依れば、河北より吐護真水（老哈河）流域の奚やその北方

の室韋に通ずる交通上の要衝をなすと共に、その三管県のうち郭下の漁陽県には

有平虜渠。傍海穿漕以避海難。又其北漲水為溝以拒契丹。皆神龍中滄州刺史姜師度開。

とある如く、北方民族の侵寇に備へる水渠や漕運用の水路が作られており、漕路は海運に連つてゐた、従つて平盧節度使に任せられた劉正臣は范陽の巡属たる薊州に攻め込み、そこから海上遣使して顔真卿に聯絡したのかも知れない。此の海上遣使は勤王派の立場を宣明した平盧藩の今後の運命にも関はる重大な意義をもつたもので、充分詳考しておかなければならぬ。

顔真卿は安祿山の挙兵当時に平原郡太守(德州刺史。德州は河北道に属し、今の山東省の徳県)の職に在り、玄宗をして「河北二十四郡、豈無一忠臣乎」と嘆せしめた際に真先に義兵をあげ、清河郡(貝州。今の清河県)博平郡(博州、今の聊城県の西北)等と協力して黄河の線を守り、賊軍の南下を防止することにとつとめ、至徳元年十月に至り史思明等の攻撃を支へ得ずして南に去つたもので、約一年間、黄河の流域に活躍してゐた。平盧より越海遣使のあつた至徳元年四月当時の彼は河北招討使として此の方面の勤王軍の総指揮に当り、右三郡の外に饒陽・河間・景城諸郡(深・瀛・滄諸州)や河南道の樂安郡(株州)等、富饒を以て知られた諸州を収め、大いに勢威を張つてゐた。其208平盧からの越海遣使を受けた真卿は、先掲資治通鑑の続文に

真卿遣判官賈載齋糧及戰士衣助之。真卿時唯一子頗。纔十余載。使詣客奴為質。

とあり、新唐書の伝の続文に

遣賈載越海遣軍資十余万。以子頗為質。頗甫十歲。軍中固請留之。不從。

とある如く、判官の賈載を宰領として糧衣等大量の軍需品を海上から平盧に送附し、然も一人息子を人質として平盧に送つてゐる。軍需品の輸送は平盧の要請に応じたものに相違なく、質子の提供は此の軍需品の輸送補給を今後も継続すべき

確約の証としたものと思われる。平盧の越海遣使の目的に就いて、資治通鑑はただ「取范陽以自効」せんと意図を表明したことを記してゐるにすぎないが、かうした意図の表明と共に、此の意図の実現を援ける補給要請の目的をも併せもつて遣されたのである。平盧藩の兵力は藩外からの大量補給なくしては保持できず、従つて早くより海運使がおかれ、天宝時代に入つては陸運使も追設せられ、陸運は范陽の所管地区たる河北を通過し、海運も亦范陽藩が掌つてゐたこと、先に詳考した如くである。従つて新平盧節度使劉正臣が勤王の立場を明かにし、叛軍の根拠たる范陽との抗争を敢行する以上、それは従来からの海陸補給の断絶を意味し、新に補給源を獲得しない限り、物資の面から自滅するか、さもなければ再び叛乱側に屈する外なかつたのであつて、ここに越海遣使の切実な要因が存してゐたと云へる。海上輸送の宰領となつた賈載とその使用船とに就いて参考すべきは資治通鑑<sup>卷一七</sup>二 天宝十四年十二月の条の顔真卿が初めて勤王の義軍を募つたことを記した続きに見える左の記事である。

祿山以海運使劉道玄撰景城（滄州）太守。清池<sup>滄州郭下</sup>尉賈載・塩山尉河南穆寧共斬道玄。得其甲仗五十餘船。真卿召載・寧及清河尉張澹詣平原計事。略。真

これに依れば、賈載は滄州郭下県の警察長官で、安祿山の海運使兼滄州知事を斬り、その所管の船舶を収めて真卿に帰した者である。五十余船の甲仗は安祿山がやがてその軍を東南支那に南下せしめる際の海上武器補給を期してゐたものであらう。その船舶武器の捕獲は勤王軍に資助する所至大であつたに相違なく、顔真卿が平盧の要請に応へて直ちに大量の物資を海送し得た所以の一は此の海船（船員を含めた）の捕獲に在つたと考へられる。又賈載が海送の宰領に當つたのは、彼が海運使の基地の警察長官として海運事情に明るかつたことと、船舶捕獲者たる因縁とに因るのであらう。

平盧藩の要請を受けた当時の顔真卿が支配してゐた七州の地域は当時の天下屈指の富裕地であつた。新唐書の地理志によつて七州の県数・戸口数及び主要土貢品目を表示すると左の如くである。これを同年の天下の州数三百二十八、県一千

顏真卿支配七州地方表（掘新・志）

州名	県庁	戸数	口数	主要土貢品目
德州	六	八三、二一一	六五九、八五五	絹・綾
博州	六	五二、六三一	四〇八、二五二	綾・平紬
貝州	八	一〇〇、〇一五	八三四、七五七	絹・氈
滄州	七 <small>註209</small>	一二四、〇二四	八二五、七〇五	布・柳箱・葦簞・糖蟹等
瀛州	五	九八、〇一八	六六三、一七一	絹
深州	七	五八、八二五 <small>註210</small>	三四六、四七二	絹
棣州	五	三九、一五〇	二三八、一五九	絹
合計	四四	五五五、八七四	三、九七六、三七一	
平均	六・三	七九、四一一	五六八、〇五三	

唐の戸口統計に於ける甚しい地域的粗密差のあつたことを考慮し、河北は最も密であつたことを注意しなければならぬが、それにしても七州が全国の平均を大きく抜く戸口稠密の大州であつたことを知る資料となる。此れら七州を含む河北・河南の地は当時の中国に於ける最大の産絹地であり、又穀倉地帯でもあつた、更に滄州は渤海湾の海産物の中心であり、その産塩は近世清朝に至るまで河南北の需要を充してゐた。滄州の統計戸数十二万はほぼ隴右一道約二十州の統計戸数に匹敵するが、この様な七州の戸口繁衍は此の地域の経済的繁栄を示すものである。滄州が渤海湾海上交通の中心港をなしてゐたことは既述の如くである。此の地域の豊かな物資は早くから滄州を経て平盧に海送せられてゐたであらう。かう

五百二十八に比すれば、七州はその大約五十分一、四四県は大約三十五分一にすぎないが、戸口数に就いて見るに、開元末の調査ではあるが、天下の総戸数八百四十一万余、総口数四千八百一十四万余に比して、七州の戸数は大約十五分一、口数は大約十二分一に達する。又天下の一州平均県数は大約四・六、戸数は大約三万六千、口数は大約十五万となるから、七州の平均県数は大差なしとしても、平均戸数は大約三倍、口数は四倍近くに達する。勿論、この比較に於いては



した過去の実情と、たまたま此所に勤王派の顔真卿が拠つたことが平盧藩の越海仰資を思ひ立たしめた所以であらう。顔真卿は平盧藩の要請を快諾したが、新唐書・顔真卿伝を見るに、肅宗即位（至徳元年七月）より後のこととして

時軍資困竭。李萼勸真卿収景城塩。使諸郡相輸。用度遂不之。第五琦方參進明軍。後得其法以行。軍用饒雄。

とあり。流石に豊饒の七州地域も打続く軍資の徴収によつて財用の缺乏を来し、よつて滄州の海塩を専売して費用をまかなつたこと、唐代権塩の創始者と云はれてゐる第五琦も実は真卿の権塩に学んだものであること等を記してゐる。李萼は貝州の人、真卿の参謀陣の一員であつたが、未だ二十余歳の青年であつた。唐の権塩はこの一青年によつて着手せられたわけである。

顔真卿から海上補給を取付けた平盧節度使劉正臣は范陽を背後から衝かんとして軍を進め、長楊を攻め、独山に戦ひ、渝関・北平を襲つたが、協力を約した奚の裏切りによつて蹶跌し、奚軍は董秦の奮戦で破り得たものの、史思明に大敗し、死者七千人の大損害を出して逃げ帰つたと云ふ。時に至徳元年六月である。<sup>註211</sup>長楊は新唐書<sup>九</sup>地理志・河北道・平州の条に十二戍の一として見えており、渝関は山海関の西方、北平は平州である。独山はこれらの地と方面を異にし、今の熱河省・平泉の南であらうと推定せられてゐる。<sup>註212</sup>即ち独山は奚との交戦地、長楊・渝関・平州は范陽軍との交戦地と解せられる。范陽軍との交戦地が平盧の支郡たる平州内の長楊・渝関・平州となつてゐるのは、此の州域が長城内にあつて平盧の会府よりも范陽の会府に近便な關係に在つた為、平盧が范陽に対立した際、たちまち范陽の圧迫を受け、平盧の范陽対策は寧ろ平州の確保に力を入れなければならなかつたことを示してゐるものと解せられる。

劉正臣が平盧に逃げ帰つた後の動きを見るに、劉正臣は安東の王玄志に殺され、よつて祿山は徐帰道を節度使に任命したが、王玄志は都將侯希逸等と彼をも襲殺し、衆に推されて自ら節度使になつたと伝へられてゐる、資治通鑑<sup>卷二</sup>一、旧唐書<sup>卷二四</sup>一侯希逸伝、その他に伝へる所は悉く右の通りで、いはば右の推移は諸史の一致した伝へであるが、然し此の推移に

は内容的に首肯し難い数々の疑問を含んでゐる様に思はれる。第一に勤王の戦に敗れ帰つた節度使劉正臣を同じ勤王側に立つ同志の王玄志が殺害したことの疑問、第二に拳藩勤王に固まつてゐた平盧の節度使に禄山任命の者が果して就任可能であつたかと云ふ疑問、少くとも此の二つはよく検討して見る必要がある。幸に此の検討には有力な参考となる好史料が日本に伝へられてゐる。

日本紀略(国史大系本)前篇十一所収の続日本紀<sup>卷二</sup>一 淳仁天皇・天平宝字二年、即ち唐肅宗の乾元元年(七五八)十二月戊甲の条に、遣渤海使・小野朝臣田守等より奏報せられた唐国の消息として安禄山の乱のことが記されており、その一節に至徳元年(一昨年)のこととして

平盧留後事徐帰道道果毅都尉・行柳城俱兼四府経略判官張元潤。来聘渤海。且徵兵馬曰。今載十月当撃禄山。王須発騎四万来援平賊。渤海疑其有異心。且留未帰。十二月丙午。徐帰道果鳩劉正臣于北平。潜通禄山幽州節度使史思明謀撃天子。安東都護王玄志仍知其謀。帥精兵六千余人。打破柳城。斬徐帰道。自称権知平盧節度。進鎮北平。云云。(以下後引)

とある。事件直後に齎されたなまなましい情報で、その意味に於いて史料的价值の極めて高いものであるが、云ふ所の内容に順に条書すると

- (1) 平盧節度使劉正臣の南征に際し、平盧の留守司令官となつていたのが徐帰道で
- (2) 徐帰道は安禄山を討つ為と称して渤海に四万騎の援軍を頼んだが、渤海は彼に異心のあるを疑ひ応じなかつた。(十月)
- (3) 二箇月後の十二月、果して徐帰道は劉正臣を北平で毒殺し、潜かに禄山の任命した范陽節度使史思明に通じた。
- (4) 安禄山側に通じた徐帰道も表面は知らぬ顔していたが、王玄志はそれを見破つて六千の兵で彼を平盧に襲殺した。
- (5) 王玄志は権知平盧節度と自称し、北平に進出した。

安史の乱による唐の東北政策の後退と渤海の小高句麗国占領(日野)

となる。述べられてゐる事件の推移過程は頗る合理的で、中国側の史料に見える疑問を解決するに足る。即ち徐帰道は元来劉正臣配下の平盧軍内有力將校として留守司令官であつたが、恐らく正臣に代つて節度使たらんとし、よつて密かに禄山側の史思明に通じ、正臣を北平に毒殺し、それによつて禄山から平盧節度使に充てられたものと解せられる。恐らく人を北平に遣し鳩毒を以て暗殺せしめたのであらう。果して然らば劉正臣は敗れて平盧に逃げ帰つたのではなく、平州で毒殺せられたのである。賊に通じた徐帰道が勤王藩たる平盧の会府に在府し得たのは、表面あくまで通敵を隠してゐたからであらう。王玄志が徐帰道を殺したのは此の隠密に運ばれた通敵を見破つたからで、いはば同志劉正臣の仇を復したわけである。中国側史料に云ふ王玄志が同志劉正臣を毒殺したとの不可解な行動は明かに誤伝と見るべきである。王玄志が徐帰道を殺すべく平盧を襲つた際の兵力六千は都護府側の兵力が弱少でなかつたことを示す。玄志は直ちに平州に赴いてゐるが、これは毒殺された正臣の旧部兵を安撫し、速に范陽対策を建て直す為であつたのであらう。平州に赴いた後の玄志の活動に就いては資治通鑑<sup>卷二</sup>一九一至德二載正月の条に徐帰道襲殺の記事に就いて

又遣兵馬使董秦。將兵以葦筏度海。与大將田神功擊平原・樂安下之。防河招討使李銑。承制以秦為平原太守。

とある。即ち兵馬使の董秦に歩兵三千を授け（兵数は後引史料参照）、葦筏を組んで海上を南下せしめ、命を受けた秦は渡海に成功して平原・樂安（徳・棣）を下し、平原太守となつてゐる。旧唐書<sup>卷一</sup>李希烈伝に

李希烈。遼西人。中。後隨李忠臣（秦の改名）過海至河南。云云。

とあり、同書<sup>卷一</sup>陽惠元伝に

陽惠元。平州人。中。後与田神功・李忠臣等相繼渡海至青齊間。忠勇多權略。云云。

とあつて、李希烈・田神功・陽惠元等、やがて名帥猛將の名を擅にした諸將が董秦に従行してゐる所から推すに、此の時の南下部隊三千は平盧の精銳をえりすぐつた者であつたのであらう。葦筏渡海と云ふ特殊事情の為に兵数を三千に絞つた

のであらうが、その代りに精銳を粒選りしたのは、此の渡海部隊に大きな期待がかけられてゐたことを想はしめる、然らばそのかけられた期待は何であつたか。

董秦の渡海南下のことは新唐書<sup>卷二</sup>李忠臣<sup>二四</sup>（董秦）伝に一層詳しく記して

節度使王玄志使秦率兵三千。自雍奴桴葦絕海。擊賊將石帝廷・烏承洽戰累日。拔魯城・河間・景城。收糧資以  
実軍。

とあり、彼の海上乗出し地點が雍奴であつたこと、平原・樂安の外に魯城・景城・河間等の諸郡をも抜いたこと等を知ることが出来る。雍奴のことはしばらく置いて先づその占収地を検討するに、その位置より推して、魯城<sup>註213</sup>↓景城↓河間↓平原↓樂安の順序に<sup>註214</sup>経略し、平原に根拠を求めて朝廷よりその太守に任せられたものと思はれる。彼等の一隊は後に山東方面に入つて居り、先掲の陽惠元伝に「至青齊間」とあるのは此のことを指してゐるのであるが、それは時間的に少し後のことで、南下軍が先づ占拠したのは平原郡を中心とした一帯の地である。平原は先に顔真卿が太守となり、景城・河間・平原・樂安・清河・博平・饒陽等の地域を支配してゐた所で、南下軍の占収地は此の真卿の支配地と大体同じ所である。真卿は叛乱の勃発直後から此の地域によつて賊軍の南下を防ぎつつ平盧藩への補給物資を調達發送してゐたが、至徳元年十月、史思明の攻撃を支へ得ずして南に去り、爾來此の地方は賊手に渡つてゐた。南下軍はその三箇月後の二年正月に再び此の地域を奪還したのである。この様に見て来ると、平盧軍の精銳部隊を率ゐた董秦の渡海南下は顔真卿の敗退によつて断絶した平盧への補給を再開せんとしたものであることが推察せられる。上掲の新唐書の伝には南下軍が諸郡の攻略で得た資糧に就き単に「以実軍」とあり、一見、南下部隊自身の資糧にのみ充当したかに受取れるが、旧唐書<sup>卷一</sup>李忠臣伝<sup>四五</sup>には

至徳二載正月。玄志命忠臣。以歩卒三千自雍奴為葦筏過海。賊將石帝廷・烏承洽來拒忠臣。与董竭忠退之。戰累

日。遂取魯城・河間・景城等。大獲資糧以赴本軍。復与大將田神功率兵討平原・樂安下之。擒偽刺史臧瑜等。防河招討使李銑。承制以忠臣為德州勅史（平原太守）。

とあつて、大いに獲得した資糧を本軍に赴送したと記してゐる。「本」の一般的用法は現在の邦語の「その」に当るが、此の場合の「本軍」は「赴送」とある一句から考へて、平盧に居る藩の主力部隊を指してゐるものと解しなければならぬ。果して然らば南下軍の目的は顔真卿の喪つた地域を奪還して此の地域からの平盧への海上補給を復活せんとするに在つたことが確認せられるわけである。

董秦入海の地たる雍奴は天宝元年に既に武清と改められてゐた所で、今の北京と天津との中間、現武清県の東方に當ると云ふ。此所から入海したのは当時の渤海灣が今よりもずっと深く灣入して現在の天津地方は海であつたからである。<sup>註215</sup>天津附近のみならず、河北一帯の沿岸や山東基部の北岸、更には遼河口東西一帯の沿岸等、当時の渤海灣は今よりずっと深く灣入してゐたのであつて、このことを考へに入れておかなければ当時の歴史を誤る危険がある。葦筏に就いては、後年の兵書ではあるが、宋の曾孝亮の武経總要<sup>卷一</sup>水攻の項に蒲筏・械筏の図繪があり、又蒲筏の製法を説明して

蒲筏者。以蒲束九尺圓顛倒為十道。縛如束槍狀。量長短為之。無蒲用葦。可以浮渡。

とあるから、葦筏・蒲筏を以て軍を渡す兵法は中国兵学の中にかねてから取入れられてゐたのであらう。先掲の顔真卿支配七州中の滄州の土貢品目中に葦製品があることから察せられる如く、渤海灣岸の遠浅の所には恐らく葦が生茂つており、南下軍はそれを利用したのであらう。又葦筏の南下は灣内の潮流を利用したものと思はれる。渤海灣の沿岸潮流は灣内を左廻りに進航するに適してゐたのではないかと思はれるふしがある。

平盧藩は藩外からの補給なくしては藩軍の支持が困難であり、董秦等三千兵の渡海南下もかうした事情の下におかれた平盧藩として断行せざるを得なかつたものである。藩外からの補給が平盧藩にとつて此の様に切実なものであつたとすれ

ば、至徳元年十月、史思明に敗れた顔真卿が平原を中心とする数郡の地を失つて南に逃れ、平盧藩への補給が断絶した事件は平盧藩に対して大きな衝撃を与へた筈で、かうした見方に立つて劉正臣・徐帰道・王玄志等三代の平盧の帥の進退成敗のあとを顧ると、その然る所以が最もよく理解せられる様に思はれる、

中国史伝に依れば劉正臣が殺されたのは史思明に敗れたことに因由してゐると云ふ。然し正臣が徐帰道に鳩殺せられたのは、日本側の史料によつて明かな如く、十二月のことで、場所は平州であり、正臣が史思明に敗れたのはそれより六箇月前の六月であるから、彼の鳩殺を敗戦に因由すると云ふのは些か腑に落ちない。鳩殺と敗戦との間の六箇月は両事件を結びつけるには長すぎるからである。所で顔真卿が平原を逐はれ、平盧藩への補給が止まつたのは至徳元年十月で、正臣鳩殺の二箇月前である。此の補給断絶は平盧藩に取つてその生死にも関わる重大事件であるから、必ずや大きな衝撃を受け、全軍の不安を醸したであらう。そこに賊軍側の誘引がかけられることは当然考へられる所である。徐帰道は恐らく此の誘に乗つて賊軍に通じ、人心の不安に乗じて自ら藩帥たらんとし、潜かに人をして正臣を平州に暗殺せしめたのであらう。つまり補給断絶の影響は二箇月後に早くも平盧藩内の深刻な事件となつて表面化したのである。徐帰道を誅した王玄志がその翌月たる至徳二年正月に早くも董秦等の精兵を渡海南下せしめ、補給態勢の再建を急がせてゐるのは、藩を勤王側に固めつつ藩軍の統轄を維持して行くには、此の補給の確保が絶対不可欠であつたからである。此の様に見て来ると、渡海南下した部隊の海送補給に対する活躍如何は勤王藩平盧の死活に関する重要意義をもつものであつたと云はねばならぬ。德州刺史となつた董秦は至徳二年の末に濮州註216に移るまで德州を中心として此の地方の確保に活躍してゐるから、此の年一杯の補給はともかくにも続けられてゐたものと思はれる。

賊軍に通じて一時平盧の帥となつた徐帰道が渤海の兵力を引入れんとして勤王側を粧ひつつ渤海に働きかけたが、渤海の応ずる所とならなかつたことは、先に日本側の史料によつて考説したが、同じ小野田守の奏報には王玄志と渤海との交

渉にも言及して次の如くある。

至徳三年（此の年乾元元年に改む。即ち田守の此の奏報の出された年に当る）四月。王玄志遣將軍王進義來聘渤海。

且通故曰。天子歸于西京。迎太上皇帝于蜀。居于別宮。殄滅賊徒。故遣下臣來告命矣。渤海王為其事難信。且留進

義。遣使詳問。行人未至。事未可知。其唐王賜渤海國王勅書一卷。又副狀進。

即ち王玄志は乾元元年四月に渤海に使を遣し、賊徒殄滅して天子長安に還幸したことを伝えてゐる。但し渤海はそれを即信せず、事実調査の使臣を遣したが、それは日本使臣団の帰国の時迄には帰着しなかつたので、日本使臣は王玄志の使者の云ふ所が真偽何れであるかは知り得ないで渤海を去つたのである。所で安史の乱の推移を見るに、祿山は子の慶緒に殺され、慶緒の勢は急に蹙つて至徳二年十月には兩都の恢復就り、十二月には賊の驍將史思明も唐に降り、賊軍の地盤たる河北さへも、慶緒が遁入した最後の地の相州を除く外、「河北率為唐有矣」と云はれるまでになり、至徳二年から翌乾元元年の春頃までの形勢を以てすれば、唐朝の勢威の再確立成れりと云ひ得る状態であつた。此の形勢は史思明の再叛でやがて崩れ去り、再び大戦乱に突入するのであるが、日本人が渤海で入手した叛乱の情報はこの一時的鎮静期のものであるから、「天子歸于西京。殄滅賊徒」等、その云ふ所は大体に於いて実を得てゐたと云へる。従つて此の情報源となつた王玄志の使臣の云ふ所も真相であつたことになる。尚王玄志の使臣は渤海への唐の天子の勅書を携へてゐるから、玄志の遣使は彼の一存に出たものではなく、中央の指示に従つたものと云へる。つまり一時は全く危殆に瀕した唐朝の勢威恢復を東方の強國渤海に伝へてその万一の妄動を防がんとする中央の政策を奉行したのが王玄志の遣使であつたのである。叛乱鎮静の報を受けた渤海は此れを即信せず、自ら真相探索の使臣を派遣したと云ふ。渤海が唐の内乱に捲き込まれることを警戒し、中国側より送られる使者の言動には容易に乗らなかつたことが知られる。

王玄志は叛乱の一時的鎮静期たる乾元元年に死し、その後は侯希逸が衆に推されて節度使となつたが、叛乱は再燃して激

戦が繰返され、侯希逸は激戦奮闘の連続であつた。旧唐書卷一四侯希逸伝に彼が節度使となつてからのことを述べて

既數為賊所迫。希逸率勵將士。累破賊徒向潤客・李懷仙等。既淹歲月。且無救援。又為奚所侵。希逸拔其軍二万余人。且戰遂達于青州。

とあり、希逸は屢々叛乱軍に迫られ、累りに此れを破つたとは云へ、南の賊軍の外に北の奚からも攻められ、孤立無援となつた為、その軍二万を以て賊中を突破し青州に入つたと云ふ。奚は当時最も活潑に動き、専ら掠奪を事としてゐたもので、その活力は契丹を凌いでゐた觜がある。平盧を苦しめた遊牧民族の代表として奚をあげてゐるのは、当時の彼等が契丹よりも戦闘的であつたからである。渤海には言及してゐないが、此れ迄の態度から推して局外に立つて不介入の方針を守つてゐたであらう。かうした環境の不利が希逸の平盧脱出を決意せしめる要因をなしたことは当然疑ひないが、それと共に右の伝には觸れてゐない海上補給の状態をも考へて見る必要があらう。然しその前に侯希逸の南下の年月を一応明かにしておかなければならぬ。

資治通鑑卷二二上元二年末の条に侯希逸の孤立化を述べた後

乃悉率其軍二万余人。襲李懷仙破之。因引兵而南。

とあり、翌宝応元年正月戊申の条に

平盧節度使侯希逸。於青州北度河而会田神功・能元皓於兗州。

とあつて、一見、侯希逸は上元二年末に平盧を発ち、翌年正月、一月もかからぬ中に青州に入つたかの如く受取られる。然しそれは敵中を突破する大軍の移動日數としては余りにも短かい感がある。南下作戦は更に以前から初められてゐたと見るべきであらう。尤も資治通鑑卷二二上元二年五月戊戌の条に

平盧節度使侯希逸擊史朝義范陽兵破之。



とあつて、上元二年五月には史朝義の范陽の兵と戦つてゐるから、未だ南下してゐなかつたことが知られる。所で同巻に依れば史朝義はその二箇月前の三月に自ら帝位に即き李懷仙を范陽の留守に任命してゐるから、五月に侯希逸が史朝義の范陽の兵と戦つたと云ふのは李懷仙との戦であつたことになる。又先掲の資治通鑑上元二年末の記事には侯希逸は李懷仙を破つてから南下したとある。果して然らば侯希逸は此の五月の戦のあと南下したことになる。恐らく五月の范陽攻撃は侯希逸がその南下の為に賊に一撃を与へ、爾後の行動を容易にせんとしたもので、いはば南下始動の作戦であつたのであらう。資治通鑑が彼の南下を上元二年末の条に繋げてゐるのは、数箇月に及ぶ南下作戦をその作戦が殆んど完了に近づいた上元二年末の所で一括して敘述したまでであらう。此の様な繫年敘述の仕方は資治通鑑に屢々見出される所である。つまり侯希逸は王玄志の死後を承けて乾元元年に節度使となつてから上元二年の五月頃まで足かけ四年にわたつて平盧に於いて奮戦してゐたわけで、伝の「既淹歲月」とは此の時間的経過を表したものである。そこで此の期間に於ける先の董秦等南下部隊の活動をその使命たる補給の面から窺つてみる。

至徳元年末に德州から濮州に移つた董秦（劉正臣）は黄河地域に於ける勤王軍の花形として活躍したが、翌々乾元二年九月、賊帥史思明が汴州註19を陥れた際、此れと戦つて擒へられ、後に脱出したが旧部下と離れて神策軍に入つた。註20此の時彼の部下の少からぬ数が史思明に帰し、旧唐書卷二史思明伝に彼が劉正臣を破つたことを述べて

將卒精銳。皆平盧戰士。南拔常山趙郡。又攻河間。云云。

とある如く、史思明の軍を大いに強力化したと云ふ。その数は三千人中の一部であるが、それによつて史思明の軍が精銳化したと云ふのは、平盧の軍士が東北边防の第一線に立つて常に契丹・奚・靺鞨・室韋等の慍悍な民族と戦ひ、実戦に鍛へられて、内地の兵とは比較にならぬ精銳となつてゐたからであらう。劉正臣のあとをついで俘獲を免れた部隊の長となつたのは田神功である。旧唐書の伝に依れば、南下部隊を率ゐた彼は頻りに沿岸の賊と戦つてゐたが、淮南に劉展の乱が

起ると命を受けて赴征し、揚州に入り、同伝に

至揚州大掠百姓商人資産。郡内比屋発掘略偏。商胡（揚州在留外国人貿易業者）被殺數千人。

とある如く、地中を偏く掘り起してまで徹底した掠奪を行つた。資治通鑑は此の掠奪を先づ卷二二一・上元元年十二月末の条に繋げて

神功入広陵及楚州（胡註。楚州当属上句。蓋先入楚州。然後入広陵）大掠。殺商胡以千數。城中地穿掘略偏。

と記し、次いで卷二二二・翌二年正月の条にも

平盧軍大掠十余日。安史之乱。乱兵不及江淮。至是其民始懼荼毒矣。

と記して、その掠奪の徹底振りを述べてゐる。乱の鎮定後、田神功は六月に徐州刺史に任ぜられ、次いで山東の淄青節度

使に昇任せられた。<sup>註221</sup>昇任の年月は確かにし難いが、翌宝応元年には節度使となつており、歴代方鎮年表<sup>卷三</sup>平盧の項も顔魯

公集を引いて宝応元年であることを証してゐる。但しその月日は判らない。然し後述する侯希逸との關係から年初の頃と思はれる。

南下軍の行動を以上の如く見て来ると、彼等は史思明の再叛後次第に河北から追出されて河南に下つて行つたことが窺はれる。殊に劉正臣が捕へられてから後の南下軍は河南と淮南との間を往来し、最後に山東に復歸してゐるが、それまで久しく渤海灣岸から離れてゐる。此の間、彼等が物資北送の任務を忘れ去つたとは断定し難く、資治通鑑に揚州を大掠した彼等が山東南岸の海港楚州に入つたとあるのは、此の大掠が物資の海上北送と關係してゐたことを想はせもするが、<sup>註222</sup>劉正臣の捕へられた乾元二年九月以後の海上補給が日益し不振に陥つたことは充分考へられる。そして此の補給の不振が平盧本軍の挙藩南下を決行せしめた最大の要因であらう。挙藩南下の始動作戦としての范陽攻撃のあつた上元二年五月は、先の南下部隊が淮南に赴征して物資の北送に最も不利な位置に移つた昨年（上元二年）の末から約半歳を経た頃で、平盧藩の窮困

が最も甚しくなつてゐた筈の時である。挙藩南下の外に平盧の活路は無かつたものと思はれる。南下始動作戦のあつた翌六月に田神功は河南の徐州に移つており、次いで青州節度使に移つたが、此の青州入りは挙藩南下の平盧本軍の受容れと關係が深かつた。

新唐書<sup>卷一四四</sup>田神功伝に揚州の掠奪に続けて

遷淄青節度使。会侯希逸入青州。更徙兗鄆節度使。

とあつて、淄青節度使となつた田神功はそこで平盧本軍の大部隊を率ゐて南下して来た侯希逸を迎へ、淄青藩を彼に譲り、自らは隣の兗鄆藩に徙つたと云ふ。資治通鑑<sup>卷二二二</sup>宝応元年正月戊申の条には此の二人の会合を記して

平盧節度使侯希逸。於青州北渡河。而会田神功・能元皓於兗州。

とあり、その会合の地は兗州、会合の時は宝応元年正月であつたことを明かにしてゐる。会合の地が兗州であつたことは旧唐書<sup>卷二四</sup>田神功伝にも見えてゐて紛れない。兗州で会見して後に青州に入つたのであらう。青州に入つた平盧節度使侯希逸が青州節度使となつたのはそれより數箇月後の五月である。<sup>註223</sup>

侯希逸の率ゐる平盧藩本軍二万の南下は先の董秦の場合と同様に海上に由つてゐた。新唐書<sup>卷一四四</sup>侯希逸伝に  
乃拔其軍二万人。浮海入青州擲之。

とあり、旧唐書<sup>卷一四四</sup>邢君牙伝に

充平盧兵馬使。安祿山反。随平盧節度使侯希逸過海至青徐間。

とある。時に既に河北は賊軍に歸して上陸すべき地なく、よつて山東にまで航したわけで、董秦の時に比して輸送の人員は七倍に近く、距離は遙かに長かつたわけで、その渡海南下は正に壮挙であつたと云ふべきである。

山東に入つて青州節度使となつた侯希逸はそのまゝ平盧の軍号を保持することが認められ、これより此の節度使は淄青

平盧軍節度使と呼ばれることとなつた。資治通鑑<sup>卷二</sup>宝応元年五月甲申の条に

以平盧節度使侯希逸為平盧青淄等六州節度使。(青淄齊海沂密六州)由是青州節度有平盧之号。

とある。このことは遼西の在来の平盧藩を撤廃して再置しない方針が決定せられたことを意味する。即ち遼西平盧藩の没落に外ならぬ。

安祿山の乱の勃発と共に遼西の地に孤立して勤王に奮戦した平盧藩は六年を経過した上元二年(七六一)末を以て、藩軍の精銳二万を率る渡海南下を以て此所に全く没落した。勤王藩として遼西に孤立した平盧藩の維持が内地からの海上補給に繫つてゐた以上、その補給への並々な努力、殊にその為の有力部隊の葦筏による海上南下等は、たとへ渤海湾海上史を彩る壯觀であつたにしても、嘗て則天時代の大唐が渤海湾上からの補給を続け得ずして遼東の安東都護府を放棄した歴史を回顧するならば、大内乱の渦捲く中に渤海湾の海上補給を続けることは一層至難で、平盧藩の没落は必然の運命であつたと云ふ外あるまい。玄宗時代に大成果を収めた東北政策の推進機関は最前線の平盧節度使と、此れを背後から支援する幽州范陽節度使とであつたが、今や平盧は没落し、范陽は叛賊の巢穴と化し去つたとすれば、唐の東北政策は大きく後退せざるを得なかつた筈である。然しかうした大乱と唐の東北政策の後退、それに伴つて当然起るべき小高句麗国や渤海等の満洲諸勢力の新たな動きを探る為には更に平盧藩没落後に於ける遼西の情勢を検討しておく必要がある。

## 第二項 平盧軍節度使没落後の遼西

平盧藩軍が大挙南下し、遼西平盧藩の撤廃が決定せられて後も、此の地方は尚中国側に確保せられ、幽州節度使の所領に入れられてゐた。尤も遼河に近い遼西東部、即ち安東都護府周辺地域の所領關係に就いては確實な史料の証明を求め得ないが、營州を中心とする遼西西部や平州の幽州隸屬に就いては証明の史料に不足しない。

新唐書<sup>卷六</sup>方鎮表・幽州の項の宝応元年の条を見るに

安史の乱による唐の東北政策の後退と渤海の小高句麗国占領(日野)

范陽節度使復為幽州節度使。及平盧陷。又兼盧龍節度使。

とある。記述の内容に就いては検討すべき余地があるが、とにかく平州盧龍軍の地が平盧藩の没落後幽州節度使に正式に接收せられたことだけは看取せられるであらう。平州盧龍軍の地は長城内に在り、古くは幽州の所管であつたのを、天寶元年に入つて平盧に割隸したものであるから、平盧藩没落後はその旧領域のうちで此の地が真先に接收せられたものと思はれる。次に旧唐書<sup>卷二</sup>朱泚伝に、彼の父懷玉のことを述べて

宝応中。李懷仙（幽州節度使）歸順。奏為薊州刺史・平盧軍留後・柳城軍使。

とあり、此の記事も亦平盧軍留後・柳城軍使やその薊州刺史との關係等を中心として詳考すべき幾多の問題点を含んでゐるが、とにかく幽州が平盧藩没落後の營州及び殘留部隊の接收に乗出してゐたことを窺知するに足る史料である。次に先掲方鎮表の記事の後段には

置平盧防禦・本軍營田使。

とあつて、平盧軍防禦使・本軍營田使を置いたことが見える。防禦使は安史の乱の勃発以前から軍の要大なものの司令官として置かれており、乱後は一州の防衛司令官として刺史の兼任するものが多くなつてゐた。又乱後の防禦使は何れかの藩鎮に屬する原則となつてゐた。<sup>註224</sup>此の様に考へると、平盧軍防禦使の設置はその挙軍南下後の接收と駐在軍団再補強の意圖とを示すものと云へよう。防禦使は恐らく營州刺史と本軍營田使とを共に兼任してゐたのであらう。接收補強を意圖したのは勿論幽州藩で、それは此の記事が幽州の項に入れられてゐることから自明である。その後幽州が平盧（營州）を確保してゐたことは新唐書<sup>卷二</sup>朱滔（幽州節度使）傳に

大歷末。奚亂殺王。女逃歸道平盧。滔以錦繡張道待其至。

とあるに依つて明かである。次に新唐書<sup>卷三</sup>地理志・營州の条に

鎮安軍。本燕郡守捉城。貞元二年為軍城。

とあり、唐会要<sup>卷七</sup>八節度使の項にも

鎮安軍。貞元二年四月二十二日。於燕郡守捉置。

とあつて、營州治の東方、今の義県の地にあつた燕郡守捉が徳宗の時代に軍に升せられてゐる。勿論その所屬は幽州である。

以上の諸史料に依り平盧藩没落後の遼西地方が依然として中国の支配下に保たれ、少くとも西部地区の要衝たる營州や燕郡には兵団が配置せられ、藩軍大挙南下後の軍備が徐々乍らも再強化せられて行つたことは疑ひないものと云へよう。但しその再強化は幽州管下の一支郡としての幽州藩による経営であつて、一藩の再建が目論まれた様子は無く、従つて軍備の再強化にも自ら低い限界があつたと考へられる。尚營州方面に対する幽州節度使の支配は長く唐末から五代初まで続くのであるが、此のことに就いては更めて詳考する。

### 第三項 小高句麗国に対する唐の宗主権の喪失

中興の英主玄宗が長年の努力を傾けて築き上げた東北辺外控制の最終体制は、最前線たる遼西の平盧藩と此れを背後から援ける河北の范陽藩との協力的並行強化であり、渤海・小高句麗・室韋・奚・契丹等の東北辺外にひしめく勁悍な諸勢力をよく羈縻制圧し得てゐた天宝年間の唐の覇権はかうした両藩兵力の巧な運営に支へられてゐたと云へる。最前線の平盧藩の軍隊は勁悍な諸族の直接正面に立つてゐた為、実戦的に鍛へられた精強無比の兵であつた。平盧藩前面の脅威をなす諸勢力は、此れを大別して遼東の渤海・小高句麗等通古斯系所屬のものと、遼西の奚・契丹及びその北方の室韋等東胡系所屬のものに分れてゐた。かうした形勢に対応して平盧藩の軍団配置も大体東西の二大群に分けられてゐたと云へる。即ち平盧・盧龍・懷遠三軍と渝関守捉との四軍団は東胡系諸勢力に対し、保定軍と安東・汝羅・襄平・巫閭・懷遠・燕郡

六守捉との七軍団は通古斯系諸勢力に対して配置せられたもので、前者は藩帥の会府に近く、後者は安東都護府の周辺に布置せられてゐた。勿論、此れら二群の諸軍団は平盧節度使の統帥の下に機に臨み姿に依じて東西に融通活用せられるべきものであつたが、常備体制としては東西二区の分担的な配備となつてゐたのである。天宝初年以後、渤海国勢の急激な躍進によつて唐の遼東政策の成敗の鍵は渤海対策の成否にかかるとなり、殊に渤海を威圧するに足る兵力の配備なくしては小高句麗に対する唐の宗主権の維持も有り得ないことが明かとなり、安東都護府周辺の多数軍団はかうした渤海国強化の新事態に対処して天宝初年に増設せられたものである。つまり天宝年間に於ける唐の遼東対策は、安東都護府周辺の七軍団を以て前線中の前線兵力とし、会府周辺の四軍団の兵力を以て一方に東胡系を制御しつつ七軍団後援の軍としての睨みをも利かさず、更に范陽の大兵力を以て後詰め役を果さしめる体制を採つてゐたのである。それは一応辺外控制の目的を達成した意味で成功してゐたと云へるが、安史の大乱は一拳に此の体制を根本から覆へして終つたのであるから、遼東政策も亦破綻し、小高句麗に対する唐の宗主権が失はれ去つたことは当然推想せられる所である。然し大乱と小高句麗との関係を伝へた史料は全く見出されない。そこでかうした小高句麗国に対する宗主権の喪失と云ふ立場から先に考説した大乱による平盧藩の没落過程をふり返り以て史料の缺を補ふこととする。

安史の大乱は幽州范陽を根拠として捲き起されたものである。それは唐の遼東政策の軍事体制が後詰め面で大きく崩れたことを意味し、延いては平盧藩の威力をも大きく減退せしめたこととなる。大乱に於ける平盧藩の反応は頗る複雑な変転を示してゐるが、大乱勃発直後は先づ賊軍側と官軍側との二派に分れた藩軍内の内紛として表れてゐる。更に此の内紛を細かく見るに、都護府側は終始一貫して官軍側に立ち、官賊両派に分裂動揺したのは藩の牙軍側であつた。即ち安祿山から平盧節度使に任せられた呂知誨は、至徳元年の初め頃、安東都護府の代表たる副大都護馬靈官を誘殺したが、平盧軍内の幹部たる劉客奴・董秦等は新に都護府の代表となつた王玄志の声援を得て呂知誨を殺し、劉客奴が新に節度使にな

つて平盧藩を勤王の一本に纏めてゐる。つまり遼東羈縻の直接担当機関たる安東都護府とその周辺に在る第一線諸軍団とは、安史の乱の勃発後幾何もなくして起つた平盧衙府内の二派攻争によつて平盧本軍の後援を喪ひ逆にその活動目標を在来の遼東辺外勢力から百八十度転回して平盧藩の勤王的結束の確立に向けねばならなくなつたのである。渤海・小高句麗に対する羈縻体制がその一角に破綻を来したわけで、従来の制圧力は大きく退潮し始めたと思なければならぬ。呂知誨に代つて節度使となり平盧藩を勤王側に固めた劉客奴は直ちに精銳を率ゐて長城内の平州に入り、賊の巢穴范陽の兵と戦つた。然も彼は至徳元年六月に大敗して精銳七千人を喪ひ、十二月には徐帰道の為に平州で毒殺せられてゐる。従つて藩論を勤王側に統一した劉客奴の藩帥時代に於いても、都護府が遠く長城内に戦つてゐる平盧牙軍や盧龍の精銳をその遼東羈縻の後援兵力として期待することは出来なかつた。況んや拳藩賊軍の地盤と化し去つた范陽が勤王側に立つた平盧、特に安東都護府を後援することは絶対であり得なかつた。遼東に対する唐の羈縻力の褪色は歴然と窺へる。然し此の時までは都護府側軍団の主力は尚温存せられてゐた様で、それだけに安東都護府の第一線防衛は確實に保たれてゐたと考へられる。

劉客奴を平州に毒殺した張本人が私かに賊軍に通じた平盧の留守の徐帰道であることを知つた安東の王玄志は、六千の兵を以て彼を平盧に襲殺した。此の六千の兵力こそは安東守捉を中心とする都護府周辺の諸軍団から精銳をよりすぐつたものであらう。先に劉客奴等が品知誨を殺した時、王玄志は遙かに此れを声援してゐるが、兵を率ゐて攻争に参加しては居ない。それは遼東対策の兵力を損耗せしめぬ様に配慮してのことであらう。此の温存せられた兵力は、その大部分を平州での范陽攻撃戦に送り出して残留部隊の少くなつてゐた管の平盧の留守徐帰道に取つては脅威であつたに相違なく、彼が賊に密通して劉客奴を平州に毒殺した十二月より数箇月前に渤海に使臣を遣し四万騎の出兵を乞ふてゐるのは、恐らく安東の温存せられてゐる兵力の西進を牽制せんとした工作であらう。此の計画は渤海の大乱不介入方針によつて失敗し、結局、六千の兵に襲殺せられることとなつたのであらう。徐帰道を襲殺した王玄志は自ら節度使となり、そのまま平州に



南下して范陽との攻争に患念した。即ち都護府周辺の第一線兵力の精銳六千は范陽との戦に転用せられて長城内に去つたのである。此れが唐の遼東羈縻力の弱化を一段と促進せしめたことは疑ひない。

王玄志は勤王に奮戦するうちに死亡し、代つて平盧の節度使となり引續いて奮戦してゐた侯希逸は形勢の悪化に堪へ得ずして、上元二年五月頃より挙軍南下の作戦に移り、翌宝応元年の初め、二万の大軍を統率して山東の青州に入つた。安東都護府を含めた平盧藩の没落である。此の没落が遼東に対する唐の宗主権の没落をも結果するものであつたことは云はずして明かである。

青州に入つてその節度使となつた侯希逸は平盧軍の軍号を保持することを認められ、此れより平盧節度使とは青州の節度使を指すこととなつた。このことは唐朝が平盧没落後の遼西に平盧の再建をあきらめたことを意味する。遼東を含む唐の東北政策の後退、辺外の放棄が廟堂の大方針として決定せられたわけである。平盧没落後の遼西を接收したのは幽州范陽藩（盧龍と改名）で、營州や燕郡の軍備の再強化が行はれたが、旧の都護府地区の軍備が再強化せられた形迹はない。然も幽州藩は唐末迄唐朝の支配を受付けず、自立世襲の藩鎮として独自の存在を続けてゐた。唐朝の遼東に対する支配が終に再び実現せられなかつたことは更めて説明するまでもあるまい。

上述の如く、安史の乱の勃発後、唐の遼東に対する制圧が忽ち失はれ、小高句麗がその羈縻から解放せられたことは、それまで遼東の制圧に當つてゐた平盧藩の没落過程、その中で安東都護府の没落過程、及び幽州藩の賊巢化等から紛れない当然の結果として推断せられるのであるが、史料的に此の結果を実証するものは遺憾乍ら全く見出せない。

唐から解放せられた遼東の勢力として先づ強力な活動を展開し得べきものは、小高句麗よりも寧ろ渤海であつた。安東都護府を中心とする遼西東部の地区に七軍団を増設したのは、北方の純通古斯系靺鞨諸族を併呑して俄然強大となつた渤海の西進を抑へ、それによつて小高句麗に対する唐の宗主権を守らんとしたものである。所が此の七軍団は安史の大乱によ

つて消滅したのであるから、渤海は今や小高句麗国を占領し得べき機会を与へられたわけである。唐から解放せられた筈の小高句麗国に就いての史料が中国側の文献中に求められない現在、その缺を補ふべき残された方法は、大乱によつて唐から解放せられ、従つて唐からの庇護をも失つた筈の小高句麗に対して渤海がどの様に動いたかを追及する以外にない。よつて次に渤海の動きを小高句麗国研究の立場から考察することとする。

## 第二節 渤海の小高句麗国占領

開元の末年、塞外の大帝国突厥が潰散して遊牧勢力の圧迫から解放せられた渤海は、忽ち北進の軍事行動を起し、突厥を背景として渤海に対峙してゐた弘涅・越喜、鉄利・達妬等の純通古斯系靺鞨諸族を併呑し、北隣一帯の類縁族統合の宿願を達成した。その後これら新収地の統治経営に力を注ぎ、天宝十一年には弘涅靺鞨の一大中心地であつた上京龍泉府の地に遷都した。かくして膨大な新収地域とその住民とを新たな一大要素に加へた渤海の国力は飛躍的に増大したと考へられるが、中国に安史の大乱が勃発した天宝十四年末は、渤海が北進政策の達成によつて新たな国家体制を整へ国力を充実に更に次の飛躍に移り得る態勢が十分に調へられてゐた時であつた。安史の乱はそれまで強力であつた唐の遼東に対する制圧力を忽ち萎縮せしめ、全く無力化せしめた。渤海が此の機に乗じて遼東に於ける勢力拡大政策を推進したことは容易に推想せられるであらう。

安史の乱に際し渤海が中国に対して執つた態度は官賊何れにも捲き込まれまいとする中立主義であつた様である。四万騎の援兵を請ふた祿山側の平盧節度使徐帰道に対して味方しなかつた渤海は、徐帰道を誅した勤王側の王玄志に対しても味方した形迹は無く、事件を中国の内乱として只形勢の推移を見つめてゐるにすぎない。又平盧軍の幽州藩との戦やその挙藩南下の際に乗じて遼西侵占を覘つた様子もない。平盧藩軍の大挙南下した後も中国が遼西を保ち得た所以の一方は渤海

の不侵入方針に在つたと云へる。乱中乱後を通じて渤海は中国に対して全く局外中立の立場を取つてゐたと解せられる。然しこのことから渤海の対外政策が消極的で小高句麗に対しては不侵略の態度を維持してゐたと類推するのは正しくない。

所謂満洲の地に於いて文化的・経済的に最も開けた先進地は小高麗国の領域たる遼河流域の南滿沃地で、農鋤林漁の豊富な経済力は他の地域に懸絶し、それだけに政治的にも最も重要な地域となつてゐた。満洲方面の国家は此の地域を領土とすることによつて初めて東亜の大国となるを得た。大高句麗や金帝国の発展はもとより、契丹帝国の強盛さへ此の地方の占領に負ふ所が絶大であつた。強大化を求めて純通古斯系靺鞨諸族の併合に邁進した渤海が彼等自身と全くの同族であり、満洲第一の発展地域たる小高句麗の境域に垂涎しない筈はなく、又やがて「海東の盛国」と謳はれるに至つた渤海の大発展に南滿の財力が無関係であつたとは考へ難く、必ずや渤海はかねてより遼東進占を意図し、安史の乱に乘じ唐の小高句麗国に対する宗主権の喪失と交替に此の国を占領し、それによつて海東の盛国となり得たのであらう。然しかうした推測を助けるに足る史料、即ち安史の乱に乘じた渤海の小高句麗国侵占を示す所伝は中国側文獻のうちには全く見出せない。所が幸にも日本側の文獻に此の推定の立証に役立つ記事が見出されるのである。

先に引用した国史大系本日本紀略前篇十一所引の続日本紀<sup>卷二</sup>天平宝字二年九月丁亥の条に

小野朝臣田守等。至自渤海。渤海大使・輔国大將軍兼將軍・行木底州刺史兼兵署少正・開國公楊承慶已下廿三人。隨田守來朝。便於越前国安置。

とあつて、渤海の輔国大將軍兼將軍兼兵署少正であり、行木底州刺史であつた楊承慶が渤海の大使として日本人に随つて渡来したと伝へてゐる。木底州は今の興京の西方木奇の地に比定せられ、その州城は木奇の西北の水手堡手に在る高麗大城なりと謂はれてゐる。即ち安東都督たる小高句麗国王の領州の一となつてゐたこと、嘗て論述した如くである。天平宝

字二年は唐の乾元元年（七五八）で、安史の乱の真最中である。所で此の木底州の刺史を特に行木底州刺史と云つてゐるのは注目すべきで、行の意味に就いて一応検討しておく必要がある。

唐代に用ひられた州県關係の「行」には少くとも二つの用法があつた様である。その第一は州や県等に冠附してその僑治のものたることを示す場合である。即ち州治や県治を臨時に本来の位置から他の位置に移した場合、再び本来の位置に還るまでの僑治の州県を指して行州・行県と云ひ、首都の場合は行在と云つた。元和年間、蔡州を会府として申・光二州を支郡に有してゐた淮西節度使吳元済が叛いた時、その討誅に起ち上つた憲宗は唐州の東界に臨時の蔡州庁を設けて行蔡州とし、後日本來の蔡州接收の日に備へて太子僕楊元卿を行蔡州刺史に任じてゐる。<sup>註225</sup>此の場合の「行蔡州刺史」は行蔡州の刺史である。本來の蔡州は上州であるから、その刺史は從三品たるべき筈のものであるが、太子僕は從四品であるから、右の場合の行蔡州刺史は官品の低い者の就任であつたことになる。「行」の第二の用法は官品の高い官吏が本來は自分より官品の低い者が任ぜらるべき州や県の刺史県令に權宜的に任命せられてゐる場合、此れを表す為の使用である。先掲小野田守等の上奏文を見るに、安祿山に通じた徐歸道のことを述べた部分に

平盧留後事徐歸道遣果毅都尉行柳城縣兼四府（渤海・黑水・奚・契丹）經略判官張元澗來聘渤海。且徵兵馬。云云。

とあつて、「行柳城縣」の句が見えてゐる。「行柳城縣」とは、此の場合、張元澗の職であるから、「行柳城縣令」のことでなければならぬ。柳城縣は營州の郭下縣であり、時に徐歸道は平盧軍の留後事として營州に居たわけであるから、彼が柳城縣を他に僑治せしめた筈はなく、その本來の場所に於いてその県令の職を執つて居たと見るべきである。つまり此の場合の「行柳城縣令」は「行柳城縣の令」ではなく、「柳城縣の行令」と見なければならぬ。柳城縣の格は中であるから、その県令は正七品上の文官が就任すべきものである。<sup>註227</sup>所が右の行柳城縣の張元澗の果毅都尉は武官であり、折衝都尉に次ぐ折衝府の要職で、上府は從五品下、中府は正六品上、下府は正六品下であつた。<sup>註228</sup>従つて張元澗の果毅都尉が上中下府の

何れのものであつたかは不明であるにしても、本来柳城県令たるべきものの正七品上よりも上であつたことだけは紛れない。つまり張元潤が正規の柳城県令となるには、(イ)文官でなく武官であつたこと。(ロ)品階が数階上に越えてゐたこと等の二点に於いて当時の一般官吏法には合はなかつたわけである。従つて大乱中の権宜処置として彼を柳城県の長官とする必要があつたとすれば、此れを「柳城県令事務取扱」の形式とする外ない。此の下級職務取扱の意味を表したのが「行」であつたと解せられる。此の様に見ると、行州刺史には二つの用法があり、第一は行蔡州刺史の例に見る「行州」の刺史、第二は行柳城県の例に見る州の「行刺史」である。此の様に行刺史に二つの場合があり得たとすれば、此の唐制の摸倣と思はれる渤海の行木底州刺史がその何れの用法に従つたものであるかを検討する必要がある。此の際の行木底州刺史が僑治中の行木底州の刺史であるか、それとも本来の木底州の行刺史であるかは、此の記事の解釈に重大な関係をもつて来る。唐制に依れば輔国大將軍は正二品、刺史は州の上中下の格に従つて従三品・正四品上・正四品下となつてゐた。<sup>註229</sup>つまり行木底州刺史楊承慶は武官であり、正二品であつて、文官の従三品止りである刺史に当てはまらぬものであつた。勿論、此れは渤海の事例で、唐の官制そのままのことがあてはまるとは即言出来ないが、範を唐に取つた渤海のことであるから、大体相似た体制に在つたと見て差支へあるまい。果して然らば輔国大將軍楊承慶の刺史就任は行刺史の形式をとる外なかつたことになり、行木底州刺史は木底州の行刺史、即ち木底州は僑治でなく、本来の位置たる今の木奇に在つた州と解し得ることになる。そして此の解釈は更に他の面からも支へられるのであるが、便宜上後文に論及する。

渤海の使臣は楊承慶に続いて翌三年十月にも日本人に随つて来朝してゐる。即ち統日本紀・同巻の三年十月辛亥の条に  
 迎藤原河清使判官内蔵忌寸全成。自渤海却廻。海中遭風漂着对馬。渤海使輔国大將軍兼將軍玄菟州刺史兼押衙官・開  
 国公高南申相随来朝。

とあり、此の使臣の高南申も輔国大將軍で玄菟州刺史となつてゐる。正しくは行玄菟州刺史とあるべきものであらう。玄

菟州は漢の玄菟郡に由来する。元菟郡は漢の武帝の元封三年（前一〇八）に初めて置かれ、今の輯安に治して洞溝平野一帯を管してゐたが、高句麗の勃興に逐はれ、昭帝の元鳳六年（七五）、蘇子河の上流、今の興京老城附近に退き、更に高句麗の西方進出に逐はれて後漢の安帝の即位の年（煬帝の延平元年一〇六）に更に西方に退いた。その地は今の撫順の市街地永安台に比定せられ、新城州の故地たる撫順東北の北関山城と二十数町を距てて相對してゐる。此の所謂第三玄菟郡の名は長く唐代にまで高句麗国内の要地として伝へられ、貞觀九年の太宗の第一回高句麗征伐、乾封元年（六六六）に開始せられた高宗の高句麗討滅戦等に玄菟城の名が著はれてゐる。天平宝字三年（七五九）はそれより更に百年近くも後に當るが、尚此の名が残り、玄菟州が存在してゐたのであらう。玄菟州の名は先に詳考した安東都護府下十四州及び都督府下二十三州のうちには全然見えてゐない。然しそれにしても今の撫順の地に當り、新城州に傍在してゐた此の州は明かに小高句麗国の一州であつた筈である。都護府・都督府下の所管領州中にその名を列せられないで然も小高句麗の所領として嚴存してゐた州の例は他にも見出され、今の奉天の地たる瀋州の如きもその一例であるから、同じく都護府・都督府下の所管州名中に見えてゐない玄菟州を以て小高句麗の一州と認めることは一向に差支へない。

以上、日本側の史料に見える二例の検討によつて渤海の高級武官が小高句麗の所領とせられてゐた州の長官となつてゐることが認められ、然もそれは安史の乱の酣な乾元元年から二年にかけてのことであつたことが確められる。然も此の乾元元年は安史の乱が勃発してから足かけ四年目、滿三年足らずである。従つて渤海は安史の乱が勃発すると幾何もなくして小高句麗國の地を占領したこととなる。島田好氏は此の渤海の二州占領の事實を指摘せられた後、此れを以て安祿山の乱により安東都護府に代表せられてゐた唐の遼東に於ける勢力（実は平盧藩及び此れを後援してゐた范陽の二藩に代表せられてゐたと云ふべきである）が大遼河以西に後退したのに乗じ、渤海がその故地を収めて州県をおいたものと解せられてゐる。渤海が安史の乱に乗じて遼東に進出したとする解釈は上述の愚見と正に同じで、夙く此の点を指摘せられた氏の

慧眼には全く敬服するが、同氏の見解は小高句麗国の存在を見逃した上に立てられたものであることに大きな弱点があり、小高句麗の存在を考慮に入れた上で更に詳しく考察を加へる必要がある様に思はれる。

安史の乱に際し、小高句麗国が中国の侵略を受けた筈のないことは先に述べた乱中の平盧藩の動きに照して明かであり、又別に詳述する如く、回紇や奚・契丹等の遊牧勢力もその注意を中国の内乱に引きつけられ、戦場の収穫に力を注いで特定地域の占有を推進することなく、専ら中国の城邑郷村の攻掠に奔走しており、且つその持前の強大な活動力が徐々に減退してゐて、小高句麗に強力な侵入を敢てしたとは大勢的に考へられない。平盧藩軍の大挙南下した後の遼西が尚よく中国の手に保たれてゐた所以の一もかうした遊牧系勢力の実情に在つたと云へる。即ち小高句麗が西方から強力な外敵の侵略を受けて州県を東方に僑治したとは考へられないのである。小高句麗を侵占し得る実力と条件とを有してゐたのはその東北二面に於いて接境する渤海のみであるが、渤海の侵占によつてこれをさけた小高句麗国の州の僑治が行はれる場合の移転先は渤海とは反対側の州本来の位置から見ても西南の方向に求められた筈である。此の様に見て来ると小高句麗の行州が渤海内に置かれてゐた筈は無くなる。従つて先の行木底州刺史の解釈も渤海領内に移された行木底州の刺史ではなく、原位置のままの木底州の行刺史の意味でなければならなくなり、先に推考した行木底州刺史の解釈と全く一致する。そして此のことは渤海が木底州、延いては玄菟州をもその原位置に於いて占領し、そこに品階の高い高級武官を派して刺史としたことを意味する。高級武官の刺史を置いたことはその占領が相当の武力を以て行はれ、又占領後も相当の兵力が配置せられてゐたことを暗示する。即ち渤海は安史の乱によつて平盧軍の対外威制が弛み、唐の小高句麗に対する羈縻力が喪はれたのに乘じ、有力な兵団を派遣して鎬京方面の木底州や撫順方面の玄菟州等を占領し、屯駐兵力を背景とした渤海の高級武官を刺史に任命してそれら占領の諸州を確保したのである。渤海の此れら諸州の占領は唐の勢力の後退によつて無主の地となつた遼東の接收では無く、又それら諸州は無主の地に渤海が設置したものでない。小高句麗の主権を犯

しての強占であつたのである。

二州の占領と高級武官の刺史任命とに就いて更に考へなければならぬのは、それが渤海の小高句麗国内全州に対する同様措置を意味してゐるか、或は全州ではないが少からぬ州への措置を意味してゐるか、それとも只此の二州のみに対する措置にすぎなかつたのか、と云ふ点である。徴証すべき史料がないので、的確な解決は下すべくもないが、少くとも右のうち最後の二州のみであつたと云ふことは常識的に考へ難い。刺史を任命せられた僅か二州のことが乏しい史料の中に完全に今日に伝へられてゐるとは受取り難いからである。

玄菟（元菟）州の地たる撫順は遼河・渾河・英額河・輝発河・瑚爾哈河等に沿つて營州より渤海の中京顯徳府に出で更に上京龍泉府に至る当時の滿華交通の大幹線、即ち所謂渤海の營州道上の一大要地であり、又此所からは、(1)木底州を経て渤海の西京鴨渌府（今の臨江県）に至る街道、(2)今の会元堡の地を経て鉄嶺方面に出で、それより北方の扶余（農安）方面、若しくは西方の契丹に通ずる街道、(3)西行して通定鎮（弘湏州、襄平守捉）をすぎ、契丹の住地又は營州に入る街道等が分岐してゐて、四通八達の要衝でもあつた。木底州は玄菟州より蘇子河に沿つて東行し、通化又は桓仁を経て營ての高句麗勃興の地であり、渤海の西京鴨渌府の管域である洞溝平野に入る交通幹線上の要地であり、又遼陽より白巖城を経て洞溝平野に入る街道との会通点でもあつた。つまり二州共に渤海国内の要地と陸路中国に入る関門の營州とを結ぶ交通線上の要衝に當つてゐたのである。此のことは渤海の小高句麗国内への派兵の一大目的が遼西・河北を大きくゆさぶつてゐた中国大内乱の飛沫が万一にも東方滿洲の地にまで波及して自国に累の及ばんことを警戒するに在つたことを証するものと云へよう。安史の叛軍の背後に孤立し、次第に窮迫して終に拳藩敵中を南下した平盧軍の行状を回顧するならば、河北突破に困難を感じた場合の彼等が軍を挙げて東方滿洲の地に奔逸する恐れなしとは誰しも保証出来なかつたであらう。さうした意味で渤海の小高句麗への派兵には自衛の口実があつたと云へる。乱軍東奔の場合、防衛上の要衝たる街道要地



の小高句麗国領州に派兵し、それに関連して必要となつた州の軍政を断行し、ここに小高句麗国の主権を犯すが如き渤海武官の行刺任命となつたのであらう。果して然らば、渤海の小高句麗内派兵はたとへその全州を網羅しては居なかつたにしても、遼西に通ずる他の街道上に在る要州にも及んでゐたと見るべきであらう。尤も渤海の派兵が万一の防衛に備へる意味を有つてゐたことは紛れないにしても、純粹にさうした防衛の範囲内にのみ止まるものであつたかどうかは別個の問題として更に検討する必要がある。

渤海が日本の使臣に随行して遣した大使は木底州と玄菟州の刺史で、共に渤海の本土外たる小高句麗内の占領地の州政を管掌してゐた者である。渤海が日本に差遣する大使として毎回特に此の様な駐外中の者を選定したのは何故か。何故に廟廷の官僚を選定しなかつたのか。当然抱かれる筈の此の疑問も先掲続日本紀の全文を通読するならば自ら理解せられる。彼等大使は日本の遣唐使の帰国に同行して日本に來り、安史の乱の推移とその間に於ける渤海の官賊兩軍との交渉の顛末を日本政府に報告してゐる。即ち兩大使は日本の遣唐使の帰国の世話と、安史の乱及びそれに対処して來た渤海の態度の説明とをその最も大きな使命としてゐたと解せられるのである。当時の日本は大陸文化の輸入に熱心で、盛んに遣唐使を送つてゐたが、海難事故が多かつた為、屢々往來の途を渤海に籍りてゐた。さうしたことから日本は大唐の国内事情は勿論のこと、渤海と大唐との国際關係、殊に交通路の開閉に対して至大の関心を寄せてゐた。又渤海は大唐文化の輸入に力を注ぐと共に文化向上の為の經濟力培養の必要から外国貿易の振興につとめ、日本貿易をも重視して対日外交を慎重に扱つてゐた。先の兩使臣の日本への派遣は日本が当然知りたがつてゐる筈の安史の乱の推移やそれに対処する渤海の態度等を説明して日本の要望に応へんと思はれる。勿論、その背後には安史の大乱と云ふ大事件に際會して渤海の西境が極度に緊張してゐる時、背面にある新羅や日本がどう動くかは渤海に取つて大きな関心事たらざるを得ないので、使臣をして動靜を偵察せしめ、又大乱の推移や渤海の対策に就いての説明を通じて日本の動きを渤海に取つて不利に

ならぬ方向に導かしめんとする意図を含んでゐたであらう。然しそれにしても大乱の報告が表面上の最大使命となつてゐた以上、その事情通が選ばれるべきで、此の条件に照して選定せられた結果が木底・玄菟両州の刺史であつたと解せられる。云ふまでもなく彼等は渤海交通幹線上に在る国外の要地に進出駐治し、いはば前線の要衝に在つて大乱の事情に最も精通してゐたからである。

渤海国軍の進駐、それら進駐軍の保持に籍口したと思はれる渤海国武官の進駐地刺史就任は明かに小高句麗国の主権侵犯であり、宗主国としての常識的な権限をも越えた領土の武力的占領に近いものである。此の渤海国軍の進駐が安史の大乱に備へた単なる渤海の防衛目的に出たものであるか、それともそれに托して大唐勢力の後退した小高句麗国を取込まんとしたものであるか、その何れであつたにせよ、安史の乱は肅宗一代を経て代宗の初めまで八九年の長きにわたつたのであるから、渤海軍の屯駐も長びいてゐたわけで、此の間に渤海が完全に小高句麗をその制圧下に緊縛したことは推想に難くない。小高句麗の国運は唐一代を通じて続いてゐるのであるから、此の占領が小高句麗の討滅を目指したものでないことは疑ひないが、武力進駐を伴つた厳しい制圧であつたのである。安史の乱による唐の対外威力の失墜によつて唐の制圧から解放せられた小高句麗国は一瞬の完全独立を得る暇もなく、直ちに渤海の一層強大な制圧を受け、その属国的な地位に甘んじなければならなかつたのである。

安史の乱に際し渤海の国王となつてゐたのは第三代の文王大欽茂であつた。彼は玄宗の開元二十四年（七三六）に即位しており、即位と同時に、前王大武芸が黒水問題から唐と国交を断ち干戈を以て争つて来た対唐抗争方針を一擲して修交方針に切換へ、貿易の利を逐ひ、文化の輸入を促進する陸海の遣使を盛んにした。次いで開元末年に突厥帝国が瓦解するや、時を移さず北進して扈捏・越喜・鉄利・達妬等の純通古斯系靺鞨諸族を征服し、彼等を悉く直轄領下におき、更に黒水靺鞨をも羈縻した。即ち前王大武芸が生涯熱望しつづ果し得なかつた北方進出の夢を実現したのである。欽茂は此の新

領域の経営に力を注ぎ、その統治に功を収め、僅か十年ばかりで首府を後ちの中京顕徳府に当る地から弘溼の故地たる上京龍泉府（今の東京城）の地に北遷し、新領土を加へた大渤海の経営体制を造り上げた。安史の乱が勃発したのは此の饒都から僅か数年後のことである。既に新領域の統治体制を整へて国力の一段と強化してゐた渤海として此の好機を見逃すべきでなく、此所に欽茂は又もや小高句麗国占領の成果をあげたのである。但し彼は中国との抗争は極力回避する此れ迄の方針を守つて内乱そのものには終に介入しなかつた。嘗て北方の純通古斯系靺鞨諸族の併呑とその統治に成果をあげた欽茂が新に支配下に置いた小高句麗の統治に失敗したとは考へ難い。巧に此れを経営し渤海の繁栄に結びつけて行つたであらう。彼の在位は徳宗の貞元九年（七九三）まで続き、此の年、治世五十八年の輝かしい生涯を終へてゐる。

註

203 天宝元年の十節度使一覽記事によつて安祿山の兼任に帰した三藩の兵力を見るに、范陽が九万一千四百人、平盧が三万七千五百人、河東が五万五千人で、合計は十八万人を越える。

天宝二年の平盧の數軍団増設から察せられる如く、その後の軍拡を考慮に入れると、天宝十四年末の拳兵当時の祿山指揮下の兵力は二十万を遙かに越えてゐたであらう。呼号二十万、実數十五万と云はれる兵力は祿山の南下作戦に参加したもののみの數であらう。南下軍の主力は范陽藩の兵と蕃兵とで、平盧藩や河東藩の兵は殆んど動いてゐない様である。

資治通鑑卷二一七による。

旧唐書卷一四五劉全諒伝。

右に同じ。

207 旧唐書卷一四五李忠臣伝。

208 旧唐書卷一五三の各顔真卿伝による。

209 滄州は徳宗の貞元三年に至りその弓高・東光・臨津の三県を割いて景州を置いた。従つて地理志には七県とあるが、天宝年間には十県を有してゐたことになる。景州の戸口數は、天宝以後の設置にかかる州として地理志には伝へられていない。地理志の天宝の滄州戸口數が此の景州に移した三県分を差引いた残りの七県分のものであるか、それともさうした操作をしない十県分のままのものであるか、究明する必要があるが、恐らく十県分のままのものであらう。

210 深州の戸數は新唐書の地理志に「万八千八百二十五」とあり、旧唐書の地理志も此れと同じであるが、仮りに万八千余とすれば、一戸当りの口數は二十人近くとなり、戸と口との關係が頗る不均衡となる。河北道の平均戸口率は一戸六人余

であるから、此の率から考へて万八千余は五万八千余の誤りであらうと推定した。

211 資治通鑑卷二一八至德元年六月の条、旧唐書卷四五劉全諒伝、同卷

・李忠臣伝、新唐書卷二四李忠臣伝等による。

212 滿鮮地理歴史研究報告第一冊所載、松井等学士「契丹勃興史」による。但し此の比定には全く再考の余地がないとも云へない様である。

213 唐書の地理志には此の方面に於いて魯城の名は見出せない。旧い名であらう。

214 景城は滄州の郡名。今の滄県の東南に治す。河間は瀛州の郡名。今の河間県に治す。平原は德州の郡名。今の徳県に治す。

215 樂安は棗州の郡名。今の惠民県の南に治す。前出の松井等氏「契丹勃興史」の註51、及び歴史地理二六卷一号所載の同氏「唐宋の史籍より見たる天津地方の地形変化」等参照。

216 今の山東省の濰県の東に治す

217 資治通鑑卷二〇〇至德二年十二月の条。

218 資治通鑑卷二〇〇。旧唐書卷一四侯希逸伝。

219 今の河南省・開封県に治す。

220 旧唐書卷一四五董秦伝、同書卷二史思明伝等による。

221 旧唐書卷一、新唐書卷一の各田神功伝による。

222 資治通鑑に「神功入広陵及楚州」とあるのに対し、胡註は神功の進軍を楚州から広陵に向つたものと解し、従つて右の

安史の乱による唐の東北政策の後退と渤海の小高句麗國占領(日野)

「入広陵及楚州」とあるは「入楚州及広陵」とすべきであると論じてゐるが、必ずしもそう解する必要はない。

223 資治通鑑卷二二及び旧唐書卷一、新唐書卷一四の各侯希逸伝。

224 藩鎮と防禦使・制史との統属關係に就いては東洋學報四三卷・四号の拙稿「藩鎮体制と直屬州」参照。

225 冊府元龜卷六五帝王都・招懷門・元和十二年三月己巳の条。東洋學報自二六卷四号至二七卷三号所載の拙稿「唐代藩鎮の跋扈と鎮將」第四章等参照。

226 新唐書卷四九百官志、六典卷二及び卷三等による。四万戸以上が上州、二万戸以上が中州、以下は下州(開元令)である。

227 唐の県は京県・畿県・上県・中県・下県等に分たれてゐた。京県の令は正五品上、畿県は正六品上、上中下県はそれぞれ從六品上、正七品上、從七品上となつてゐた。前註と同じ諸書参照。

228 註226と同じ諸書参照。

229 前註に同じく、尚新唐書卷四をも参照。

230 輔国大將軍は唐の官制中に見える。従つて日本に來た渤海使臣の輔国大將軍が自國のものか、それとも唐から贈られたものか、此の点を明かにすべきであるが、未だなし得てゐない。

231 初置の元菟郡を一般に第一元菟郡と呼んでゐる。その位置に就いては、今の咸興地方なりとする説と、輯安の地なりとする説とがあり、前者は学界に有力である様であるが、実は逆に輯安説が正しいと思はれる。輯安説を最も詳述したのは、

安史の乱による唐の東北政策の後退と渤海の小高句麗國占領（日野）

史学雜誌に「元菟郡考」を發表した李丙薫氏である。此の説に贊する愚見の大意は人文二卷一号に「西蓋馬と馬質水」と題して略述してゐる。

溘州に就いては更めて詳述する。

滿洲學報第三輯所収の同氏「唐末の遼東」。

**The Recession of the Northeastern Policy of the Tang  
(唐) Dynasty, Caused by the An-Shih (安史)  
Rebellion, and the Occupation of the Small *Kao-chü-li*  
(小高句麗) Kingdom by the Po-hai (渤海) Kingdom.**

Kaizaburo HINO

An-lu-shan, (安祿山), the Chieh-tu-shih (節度使) of three provinces, Fan-yang (范陽), Ping-lu (平盧) and Ho-tung (河東), rose in a great rebellion in the fourteenth year of Tien-pao (天寶), (755 A. D.).

Ho-tung was presently recaptured by the government forces. Ping-lu was set free from the insurgent army, after the forces there split into the governmental camp and the insurgent one and fought each other. Thus Fan-yang became the only stronghold of the insurgents. Ping-lu, however, became economically distressed, though set free from the insurgents of *Fan-yang*, because the supply routes, both sea and land, from *Fan - Yang* were severed. And the whole army of Ping-lu removed southward navigating the Gulf of Po-hai on reed-rafts to Shan-tung. Because the forces in Ping - lu were thus lost and Fan-yang became the stronghold of the insurgents, the hegemony of the Tang Dynasty over Manchuria, which Tang had overawed with the armed forces of these two provinces, was lost.

Po-hai, catching this opportunity, occupied with armed forces the Small Kao-chü-li kingdom, and the latter became subject to the rule of Po-hai. Since Po-hai did not advance further westward across the Liao (遼) River, the Liao-si (遼西) area remained within the sphere of Chinese influence, after the whole army of Ping-lu went to the south, and the Chieh-tu-shih of Fan-yang added this area to his domain. The Rebellion of An-lu-shan continued for nine years, its leaders being changed after his death, from An-ching-hsü (安慶緒) to Shih-ssu-ming (史思明) and to Shih-chao-i (史朝儀). During these years Po-hai consolidated the system to rule the Small Kao-chü-li kingdom.

The historical source materials on the occupation of the Small Kao-chü-li kingdom by Po-hai do not exist in China, but remain in Japan.